令和７年度　愛媛県小中学校教頭会研究主題

研究主題　　「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」（全公教主題）
キーワード＜自立・協働・創造＞

サブテーマ　　夢と志を持ち　絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成

１　第１３期全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」（令和５～７年度）

令和の時代となり、現代社会は技術革新やグローバル化の急速な進展、人口知能の進化や普及という、超スマート社会「Society 5.0」の到来が目前に迫っている。学校では、部活動の地域移行や教員不足という社会問題化している解決の難しい課題に直面している。このような将来の予測が困難な時代に、志高く未来を創りだしていくために必要な資質・能力を子供たちに育むことは、学校教育の喫緊の課題である。

一人一人の子供が、このような社会の変化に順応し、未来を切り拓いていくために、自ら主体的に行動し、他者と協働しながら新しいものを生み出し、課題の解決や改善をしていく「生きる力」を、今こそ育んでいく必要がある。そのためには、私たち教頭は、社会の変化に対して柔軟にあるいは慎重に、時には迅速に対応していかなければならない。予測困難な時代だからこそ、開かれた教育課程を実現しながら、これまで以上に子供たちにとって魅力ある学校づくりを推進していくことが大切となる。

研究主題に設定した「未来を切り拓く力」とは、子供たちがこの予測困難な時代の進展・変化に対して、適切にかつ積極的に対応する力であり、自ら進んでよりよい社会や幸せな人生を築き上げていく力である。また、「魅力ある学校づくり」とは、学習指導要領前文の「よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組んでいくことである。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼され魅力を感じていただける「開かれた学校づくり」とともに、教職員にとっても魅力ある学校づくりに取り組まなければならない。

研究主題の実現に向けて、教頭はリーダーシップを発揮するために、職務遂行にあたっての自覚を高め、自らの資質・能力を向上させるべく研究を深めていくことが求められる。教頭としての責務を果たすことができるように、3年間の継続研究を推進していく。

２　第１３期の研究の重点

第１３期では、子供たちに「未来を切り拓く力を育む」ことができる学校教育を目指し、全国共通研究課題である「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員の専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の六つの点から研究を深めていく。

研究主題に関わる「未来を切り拓く」資質や能力は、第 12 期においても示されており、それを育てていくことを継続する。人との絆を大事にし、自分の個性を生かしながら自ら考え行動し、他者と協働しながら現状を打破する力や、リーダーシップやチームワークを発揮し、新しい価値を生み出す力を育成することを重視していく。

また、「魅力ある学校づくり」では、社会に開かれた教育課程の実現に取り組むだけでなく、新しい時代に向けた持続可能な教育活動・学校運営体制を構築するため、学校における働き方改革の着実な具現化に取り組むことも重要である。

研究を推進する上で、研究主題だけでなく「自立・協働・創造」のキーワードにも関連を図る必要がある。私たちは、子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし（自立）、個人や社会の多様性を尊重し、共に支え合い高め合いながら（協働）、新たな価値を創造していく（創造）ことのできる資質・能力の育成を目指している。

そして、令和5年度から令和9年度の第4期教育振興基本計画が閣議決定され、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という二つのコンセプトが示された。ここで示された内容は、第 13 期の研究に結び付けていかなければならないと考える。

３　サブテーマ「夢と志を持ち　絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成」

⑴　【夢と志を持ち】とは

子供が将来目指したい理想や目標を持つなどの「夢」を抱き、よりよい自分やよりよい学級・学校・地域社会を創ろうとする意欲や態度、すなわち「志」を持つことである。同時に、子供を見守る全ての人の夢と志も指し、子供の成長に関わる学校・家庭・地域が一体となり、「チーム学校」となる願いを込めている。そのためには、「社会に開かれた教育課程」の推進とともに組織マネジメントが鍵となると考える。

⑵　【絆を深めながら可能性に挑戦する子供】とは

人生 100 年時代における予測困難な変化の激しい社会の中にあっても、輝く未来社会と自分を信じな

がら、粘り強く可能性に挑戦し続けていく自己実現を目指す子供と捉える。同時に予測困難な場面に対応するためには、自他を信じ共に認め合い、高め合って絆を深め、協働しながら挑戦し続けることが重要となる。

このような子供たちを育成するには、今後一層、学ぶことと社会とのつながりを意識し、知識の質・量の改善に加え、学びの質や深まりを重視した学習を着実に実施していけなければならない。また、子供たちに集団への適応や協調を基盤にした社会性や人間性、豊かな心と健やかな体を育てながら、よりよい生き方や考え方を培っていくことが重要であると考える。

4　私たち教頭は

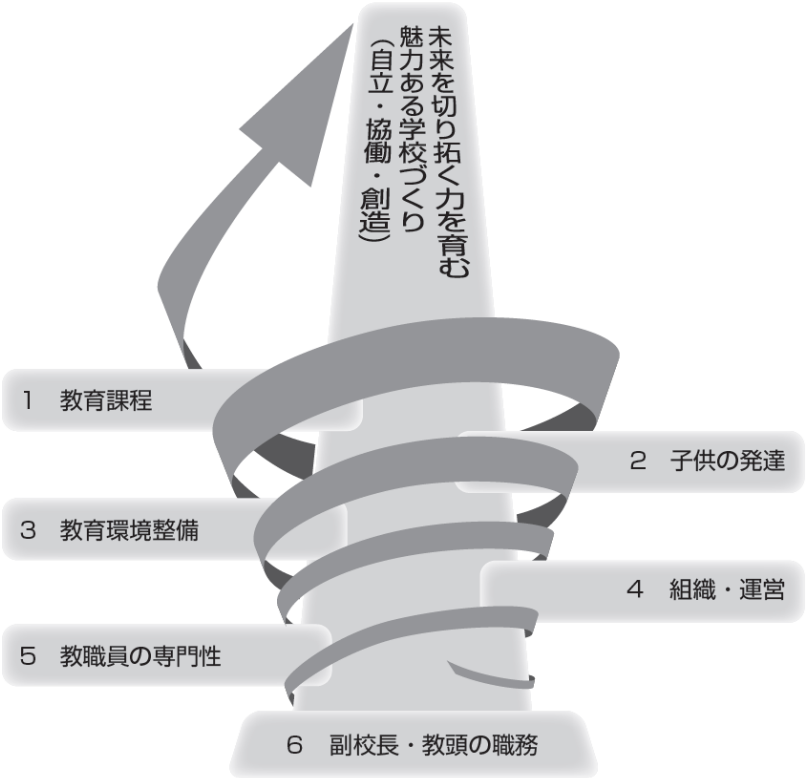
私たち教頭は、「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供」を育てていくために、教職員の意欲の喚起や資質・能力の向上に力を注ぎ、学校教育の活性化と変革を目指していかなければならない。また、我が国の教育の質を維持、向上し続けるためには、教職を目指す優秀な人財の確保・育成が必要である。そのためには、未来を切り拓く子供たちを育てる教育という仕事の責務と魅力を、我々教職員が適切なワークライフバランスにより目の前の子供たちにしっかりと向き合い、生き生きと働く姿で働きがいを発信していくことも重要である。

5　研究の推進方法

研究の推進に当たっては、引き続き継続性、協働性、関与性の３本の柱(３Ｃ)を重視する。

○　継続性(Continuity)　教頭会組織に改編があっても、これまでに解明されたことは何か、残された課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進める。

○　協働性(Collaboration)　各郡市の全教頭による協働研究を基本とし、教頭としての同僚性を発揮しながら、開かれた関係において協働的に進める。発表内容は、提言者の学校に関わる内容が中心になる場合であっても、組織に属する全員の研究を持ち寄ったり、各校の実践を互いに取り入れたりするなど、組織的に分担、協議し、研究を深めていく。

○　関与性(Commitment)　教頭として何をすべきか、どうあるべきか、どう関わるべきかを念頭に置き、各郡市教頭会の課題を明確にし、勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ、そこで得た成果や課題を各郡市教頭会に反映させつつ研究を進める。

6　第 13 期全国共通研究課題の構造